



## 新年を迎えて

～志 定まれば、気 盛んなり～

学校長 三瓶 徹

新しい年の太陽が昇りました。皆さんが、あの太陽のように自分自身を輝かせながら、社会を照らし、人々をも温めてゆく存在に育ってほしいと願っています。

そのめでたい正月、“めでたい”は、平安期の「愛でる」「心ひかれる」の意から、江戸期には、「目出度い」とあり「慶賀すべきである」や「お人好し」の意が加わってきています。積極的に「目を出そう」という姿勢がみえます。“目は口ほどにものを言い”とか、大願成就の際“だるまに目を入れる”習慣が今も受け継がれているからこそ、新しい年を迎えた歓びの季節に「目出度い」という字をあてたのだと思います。この背景には春に芽吹く植物の“芽”のイメージが息づき、草木に溢れるエネルギーにあやかりたいとする、独特の知恵が秘められているといえましょう。

さて、江戸幕末の長州藩、現在の山口県に、吉田松陰という人物がいました。目標に向かう自分の気持ちを志（こころざし）とし、その志を大切にしながら、日々実行していました。そして、「志 定まれば、気 盛んなり」という言葉を残しました。志とは、心に決めた目標に向けて進もうとする気持ち、決心のことです。したがって、この言葉の意味は、目標への気持ちが志としてはっきりすれば、自ずとやる気や意欲が生じるということです。

さらに、松陰は目標を決めるだけでは十分でない。なぜその目標を定めるのか、その目標を達成する意味は何か、と目標への意味を自分で明らかにしたり、価値あることだろうかと自分でしっかり考えたりすることが大切と考えていたようです。つまり気持ちが入り、強い意志があれば、目標について志をもち、気持ちは高まり盛んになるというわけです。

また、松陰が教えていた「松下村塾」という塾で、「抄録」という方法で、主体的な学びをさせていました。松下村塾で学び、明治の近代国家を切り拓いた多くの人物たちは、主体的に考える「抄録」という読書方法により、自分をつくりあげてくれたと振り返っているようです。さらに、その考えに何かの目標をもち、生きるための「志」が生まれ、身についた考えになったと考えられます。つまり志として、気持ちを高め、気持ちを盛んにしていったと思われれます。

皆さんも、志をもって目標を抱いてみてください。志が定まれば、必ず自分もやってみようという前向きに、やる気が盛んになることでしょう。

昨年は、本校の教育活動にご支援をいただきありがとうございました。今年もさまざまな教育活動へのお力添えをよろしく願います。なお、厳しい寒さゆえ、体調を崩さぬよう、ご家庭でも健康管理をよろしく願います。